本との出会いを楽しむ 第12回

私の密かな楽しみ

人文学部教授　清水　明

アメリカの論理学者であり、ピアニスト、老荘思想家、奇術師でもあるレイモンド・スマリアンの『タオは笑っている』であったか『哲学的ファンタジー』であったか、そのどこかに、この種の話題についてはマーティン・ガードナーの『信じる理由』(原題：Whys of a Philosophical Scrivener 、本邦未訳）を参照されたい、とあったのが、ガードナーの『信じる理由』との最初の出会いでした。ガードナーの名前は「数学パズル」に関する本や『自然界における左と右』などの科学読み物の作者としては知っていましたが、「この種の話題」というのがかなり哲学的な話題であったので、そこにガードナーの名前が出てきたことに軽い驚きを覚えたものでした。

さっそく原書を手に入れ、一パラグラフずつ訳してゆくのが毎日の日課となったのは、もう七八年ほど前のことになります。研究や授業にはあまり関係ないので、もう完全に趣味の世界です。様々な公務の合間に、研究室に独り閉じこもり、少しずつこの本を読み訳すことが私の密かな楽しみとなりました。ここで公表してしまったので、もう密かではなくなりましたが、今は同じ著者の『夜は大きい』(原題は Night Is Large 、この表題が訳せない。夜が大きいとは一体どういうことなんだ！）に進んでいますので、楽しみは今も続いています。いずれも、単なる身辺雑記や日々の心模様ではない、元祖モンテーニュの『エセー』やイギリス随筆文学の祖ベーコンの伝統を受け継ぐ本格的なエッセイです。

その間、おのずとわかってきたことは、ガードナーという人物は、単に数学パズルや科学読み物の作家ではなく、アメリカを代表するほどの知的巨人であるということでした。日本で言えば、政治から科学まで幅広い守備範囲を持つ立花隆というジャーナリストがおりますが、その立花氏を（立花氏には失礼ながら）一回り大きくしたような人物です。ガードナーは、アメリカへ亡命してきた論理実証主義を代表する哲学者のカルナップに教えを受け、カルナップと共著で『物理学の哲学的基礎』という本も書いている、専門家に限りなく近いジャーナリスト・エッセイストなのです。ジャーナリストとしての彼の書庫には膨大な量の資料があるようです。新聞記事、雑誌記事、著書その他、彼が興味を持つテーマ毎に分類された膨大な資料です。そこから彼は、政治、経済、宗教、科学、芸術、人間の行うことほとんどすべてにわたるテーマのエッセイを、ほとんど無尽蔵に生み出しました。なるほど、こうすればエッセイというものはいくらでも書けるものなのだ、と感心します。もちろんそれらの資料を捌いてゆく強靭で柔軟な知力が必要であることは言うまでもありません。えっ、と驚くような話も出てきます。『ドン・キホーテ』の作者はセルバンテスではなくサンチョであるとか、シャーロック・ホームズの作者はドイルではなくワトソンである、などです。本当かな？

（しみず　あきら）

清水先生がご紹介いただいた「Whys of a Philosophical Scrivener」は、所蔵しておりませんが、マーティン・ガードナー著作の訳本「自然界における左と右」などは本館で所蔵しています。

所在：本館新書庫２層開架　　請求記号：402/G22　　図書ＩＤ：06123150